



一日一日の地道な取組



木更津市立請西小学校長 お び てつろう
小尾 哲郎

1 はじめに

本校は、木更津の中心に近く、昭和54年4月に開校し、今年度で37年目になる。

アクアラインの開通に伴って、東京に通う人や、アウトレットやイオンモールに勤める人が新しく家を建てて住むようになり、一時は、児童数が1,000名を超えるマンモス校になった。

しかし、3年前に、真舟小学校と分離し、今年度は、学年平均3クラスの526名でスタートした。

子どもたちの多くは、「すなお」で「まじめ」で、保護者も協力的である。

2 本校の重点目標

学校教育目標は、「新しい時代を主体的に生きぬく児童の育成」とし、重点目標を次のようにした。

(1)マイブック（読書活動）の推進

私が昨年、新任校長として赴任したとき、年に2回行われる木更津市学校評価の前年の結果で気になる点があった。

それは、「一ヶ月に本を何冊くらい読みますか（二冊以上）」の項目で、市の平均を大きく下回っていたことだった。読書は、幅広い知識をもたらし、想像の世界を広げ、心を豊かにしてくれる。また、読解力を養う点でも効果的である。私自身も、他の学校で、読書指導の全国公開に関わった経験もあることから、この学校で読書指導を推

進していこうと考えた。

まず、職員会議の場で、子どもたち一人一人が常に身近に本を持っているようにすることを先生方に話し、協力してもらうことにした。

また、読書相談員や学校支援ボランティアの方々にも、協力を仰いだ。私も、校長室前の廊下に「今月おすすめの本」のコーナーを設け、毎月一冊ずつ本を紹介していくようにした。そして、読書週間を位置付け、教職員全員による読み聞かせもした。この地道な取組により、子どもたちの読書量は、確実に増えていった。そして、木更津市学校評価の結果も、二回とも、市の平均を上回ることができた。



(2)一時間一時間の授業を充実させる

学校は、「知」「徳」「体」の調和の取れた教育をするため、毎日、5時間、6時間もの授業をしている。一年間では、1,000時間を超える膨大な量である。

私は、この一時間一時間の授業を充実させれば、子どもたちに必要な学力や体力を付けさせ、心を育成できると考えている。逆にいえば、その他に特別な時間を設けて学習や夏期補習などをする必要はないし、この多忙な学校現場では、そのような時間

を取る余裕もない。

一時間一時間の授業を充実させるには、やはり教材研究が重要である。本校では、教材研究のために、放課後の時間をなるべく確保するように努めている。

例えば、4月から一か月半にわたる陸上練習は、朝練習だけにして集中して行う。授業研究も、学年で作上げた指導案をもとに、学年一人が代表して展開する。こうした研究体制により、従来の、放課後を使っの、「指導案作成→指導案検討→指導案修正→授業研究」に追われることがなくなっている。だからといって、成果が上がらないわけではない。陸上記録会でも、算数教育でも成果が上がっている。また、一年間実践してきた中で、子どもたちの学力も確実に上がっているのである。

(3)安全・安心の学校をめざして

実は、このことを一番重要視している。どんなにりっぱな教育目標を掲げようとも、経営の重点を示そうとも、子どもたちが交通事故に遭ったり、重篤なケガをしたのでは、目標を実現することはできない。

私は、毎年、始業式に、全校児童に向けて「自分の命は自分で守ろう」という、大きな筆文字で書いたものを見せ、必ず安全について話す。そして、その文字を校長室の前の廊下に掲示し、子どもたちに常に安全を意識させている。また、教職員にも、安全指導を徹底させている。月一回の安全点検はもとより、毎日、校舎内を回り、破損している箇所や、危険な箇所は、すぐに用務員さんに連絡して修理してもらったり、自分で直したりしている。特に、



小さな箇所でも、子どもたちにとって危険だと予想される場所には、危険を回避する工夫をしている。

さらに、1～4年生の交通安全教室、火災地震・不審者対応避難訓練、ワンポイント避難訓練、集団下校訓練、引き渡し訓練を計画的に行っている。



普段の学校生活の中で、擦り傷、切り傷、打撲等はあるが、おかげで、昨年度は、ケガをするような交通事故がなかったことは幸いであった。

3 日ごろ心掛けていること

私は、昨年度、校長として請西小学校に赴任した。校長就任にあたり、そんな大それたことはできないが、私はリーダーとして心掛けようと思っていることがある。教職員に対して、「感情で、怒ったり、怒鳴ったりすることはやめよう」「自分の理不尽な考えを押しつけるのはやめよう」「なるべく教職員の総意を尊重しよう」ということである。毎朝、出勤すると、校長室の机に置かれている座右の銘（戒め）の、「平



常心」「至誠通天」「泰然自若」「仁」「感謝」を心で唱え、一日に臨むようにしている。そして、帰りにそれができ

ていたかどうか（「一日克己」）自分自身を振り返る毎日を送っている。



地域と共に育て、共に歩む学校

八千代市立睦中学校教頭 やまね ひろゆき
山根 弘行



1 はじめに

睦中学区は、市の北部、新川周辺の農村地帯に位置し、オオタカやホタルなども生息する自然豊かな地域である。開校当初から校庭の木々や池、運動場や砂場など、様々なものが地域の人たちの力によって造られてきた学校でもある。また、隣接する公民館の一階が地域の人たちの活動場所、2階は理科室や音楽室などの特別教室という環境で学習が行われているため、地域の方々との結び付きが自然と強くなる。三世代にわたって支えられ、地域コミュニティの中心とも言える学校の教頭としてどのように学校を支え、生徒と地域を繋げていくのか模索の日々である。

2 PTAや地域の方々との活動

(1)国際交流活動

本校学区には睦小中学校支援地域本部「睦學友会」があり、睦小中学校及び地域の国際交流、地域交流、世代間交流、伝統文化継承などにおいて、小中学校やPTAを側面支援してくれている。特に、国際交流の面では、シンガポールへの学校訪問及びホームステイと、相手校からの学校訪問及びホームステイの相互交流が隔年で行われており、その中核と



して睦學友会が様々な面で協力してくれている。将来この地域からグローバル人材を育成することを掲げ、子どもたちにとっても、教職員にとってもたいへん貴重な体験活動が行われている。

この交流に際しての準備や運営は、保護者や地域の助けなしでは成り立たず、そのために普段から保護者や地域と協力し合い、信頼される学校であることがとても重要である。地域の諸活動においてもできる限り協力を惜しまないよう取り組んでいる。

また、交流当日やその準備に関わる全ての人たちが満足のいく行事にするため、日程や内容の調整、人間関係等がスムーズにいくように根回しをするとともに、教頭として先を見通した計画や支援となるよう心掛けています。

(2)地域交流活動

地域には睦學友会の他にも様々な活動団体があり、連携を図った活動を行っている。その中でも次の活動は、地域に定着した活動である。

①青少年健全育成協議会が中心となり、毎年地域の清掃活動を部活動単位で行っている。今年度は本市の特徴的な事業である八千代子どもサミットの環境活動と関連付け、学区にある小学校、中学校、高校、大学が連携して取り組むことを計画している。

②八千代市福祉協議会睦支会主催のふくし

祭りでの出店やポスター作り、敬老会でのお手伝いや合唱披露など、子どもたちやPTAが協力して世代間交流に関わる地域行事に参加している。

③森林保全団体であるむつみ里山の会が行う里山づくりボランティアに部活動ごとに参加し、自然との触れ合いや、地域にある危険の多かったやぶを安全な森へと変えるための手入れや、その必要性について毎年学んでいる。また、里山の会の方々を八千代子どもサミットに招待し、地域の環境について小学生から大学生までの子どもたちとディスカッションする場に参加してもらっている。

④PTAを含め、これらの団体の方々による本校の校庭の定期的な樹木伐採や草刈り、柵の修繕などにより校内環境が整えられている。子どもたちも参加し、保護者や地域の人たちと「安全で美しい学校」を作り上げている。その際、子どもたちには自分たちの学校である自覚を持たせるため、できるだけ片付けなどの手伝いをさせるとともに、「ありがとうございます」の挨拶の指導をどの部も心掛け、感謝の心を育てることを大切にしている。

(3)学力向上に向けた取組

学校が保護者や地域に信頼されるための要素として、子どもたちの学力向上があげられる。学力向上に向けた取組として、本校では学びの共同体の理念を活用した授業及び研修を行っている。これは、学習院大学の佐藤学教授らが提唱した教育実践であり、子どもたちが学び合い、そしてその子どもたちの様子から教師、保護者、地域が学ぶという理念のもとに、本校の様々な実態に合わせた教育実践を進めているところである。年間を通して職員全員による研究授業や研究協議を計画的に実施し、授業力・教師力の向上と教師の同僚性づくりを目的

として実践している。キャリア学習や環境学習など、保護者や地域の力を借りた教育活動も取り入れており、今後は、学びに対する学校の実践をより理解してもらうため、便りやホームページを活用するとともに、家庭・地域の方を更に巻き込んだ活動にする方法を模索していきたい。

3 新任教頭研修から学ぶ

新任教頭会研修では学校運営に必要な様々な講話や演習、協議などが行われたが、その中で特に星幸広氏の「保護者や地域とともに」についての講話は、自分が実際に対応してきた保護者対応の経験と照らし合わせ、思い当たるところが多々あった。問題に対しての初期対応、親の変化に対する経験則や過去の知識の依存からの脱却、本質を正しく理解し境界線を決めるなど、実践において大切にすべき内容であった。それとともに、子どもの自立という目的のために親として教師として共にどう考え行動していくかという基本概念を再認識させられた。

4 おわりに

「夢への挑戦」が、今年度の本校の学校経営のテーマである。校長の経営ビジョンのもと、それを教育課程の様々な場面で具現化していくことが自分の務めと自覚している。まずは、今ここにいる子どもたちの能力や課題を理解し、教育者としての願いや目標をたて、その願いや目標を各先生方や保護者、地域の方々と共有すること、そして様々な教育活動の中における達成感や喜びによって子どもたちがいろいろな力をつけ、学校に負託してくれている保護者や地域の人が幸せになる。そんなサイクルになるように、これからも努力していこうと思う。

学校を動かす

学び合い・支え合い・認め合える教職員集団を目指して

～元気印の教務主任として取り組んだこと～

浦安市立入船中学校教頭 やまもと のりこ
(前浦安市立北部小学校) **山本 典子**



1 はじめに

昨年度、行政職から久しぶりに学校現場(小学校)に異動し、なかなか見通しが持てず、困惑しながらも「元気印の教務主任」として勤めることができたのは、校長先生を始め北部小学校の全職員のあたたかな励ましや支えがあったからである。

どのような立場であっても学校の中で自分らしさを発揮しながら子どもと向き合い、役割を遂行するには、お互いを認め、学び合える職員集団づくりが大切であると実感した一年だった。その様な中で新任教務主任として前任校で取り組んだことを紹介する。

2 具体的な取組について

(1)教職員の指導力向上を目指した取組

①若年層教員を育成する風土づくり

(7) 若年層教員を中心とした校内研修の計画・調整・支援(5年目教員がリーダー役)。

(1) 職員に校内の初任者、2・3年目、5、10年経験者教職員の年間研修計画や内容を伝え、教職員同士が研修に関する相談をし、学び合える環境づくりをした。

②全教職員への学ぶ意欲の喚起

(7) 県や市の研修会等の参加の促進。

教職員のニーズにあった内容の研修会や講師の紹介をし、参加を促した。職員会議等では研修会で学んだことを報告する時間を設け、簡潔に発表してもらった。

(1) 保小中連携教育の視点を取り入れた教育の充実。中学校区の学校・幼稚園だより等の回覧をし、情報の共有化を図った。

③どの子もわかる学習のための環境整備

(7) ユニバーサルデザインの視点を生かし

た学習環境(可視化)づくりの推進。

教職員一人一人に分かりやすい説明や提示のあり方を意識してもらうため、会議等の提案では視覚支援を取り入れ、分かりやすい説明になるよう心掛けた。

(1) 全校児童への注意や呼びかけには一目で分かる掲示物を使用した。

(2)相談体制の充実

関係機関を招いてのケース会議を定期的に行き、当該児童担任だけでなく、学年全員、生徒指導主任も参加し、学年・学校全体で支援できる体制づくりをした。



(3)効果的な行事への取組に向けて

常にPDCAサイクルを意識した行事づくりに努めた。例年通りにとどまらず、現状を把握しながら取組めるよう工夫した。

3 おわりに

朝の打ち合わせは、学級担任が明るい気持ちで教室に向かい、子どもたちと学べるよう笑顔で司会をし、あたたかい雰囲気で行った。「今日も頑張るぞ・オー」の掛け声で笑いが。

また、日頃から先生方の良い所を認め、伝え、感謝の言葉掛けを行い、様々な形でコミュニケーションをとり、困っていることも相談できるような関係づくりをした。

子どもたちが明日も来たいと思える学校には、元気で輝いている教職員集団が必要である。現在、私は入船中学校で勤務している。元気印はいまだ健在である。



実践あるのみ

～人は行動で決まる～



本校のゆるキャラ
「こなぎー」

さとう ひろき
佐藤 宏樹

県立湖北特別支援学校教諭

1 はじめに

私が所属する湖北特別支援学校は、平成26年4月に開校した。27年からは、流通サービス科も開設され、県内唯一の普通科と専門学科の同一敷地内の併設校である。6月現在、普通科86名、流通サービス科32名の計118名の高等部の生徒が在籍している。教育の目標の中には、「個性を伸ばし豊かな人間性や社会性をはぐくみ、社会自立・職業自立できる生徒の育成」を掲げている。

昨年度、県立の障害者高等技術専門校に研修に出させてもらい、私自身の得た知識や技能を日々の授業や専門実習で実践すること、研修会や資料を通して校内への知識・技能の普及に取り組むことが研修の成果であると考えている。

2 研修後の取組

(1) 学校での取組

昨年度の3学期に職員向けの報告会及び所属する普通科の作業学習の授業の中で生徒向けの研修報告会を行った。普通科の生徒にも、伝えるべき内容を厳選し報告することで生徒からの感想をたくさんもらえ、やってみて手応えを感じた。職業の授業では、専門校で学んだ「ダスター」を「フローリングワイパー」に置き換え、普通科の生徒への知識・技能の普及を行った。学校生活の清掃の多くは、ほうきではなく、ぞうきがけであり、生徒にとっては新鮮で夢中になる教材であった。清掃だけでも、簡易に扱える物がたくさん開発されているので、目的に応じて使用する物を選択することで、生徒にとっては新鮮な授業となるのではと考える。

今年度は流通サービス科の担当となり、流通メンテナンスコースで清掃やパソコン指導等を実践している。スーパーの品出し等に使用する「カゴ車」を体育祭の種目に取り入れ、正しい使い方、箱の積み方、移動の仕方等の知識・技能の習得をねらった。少ない時間ではあったが、繰り返し取り組むことで、①丁寧な積み方、②カゴ車がジグザグのコースにぶつからないこと、③タイムの向上で成果が表れた。開設して2年目を迎え、研究でも専門実習の充実を図り、外部講師（プロ）から教わったことを技術だけでなく、職員で一丸となって資料に残していくつもりである。

(2) 働くためのスキル

専門校では、全ての訓練が働くために必要なことに絞られていた。様々な分野で卓越した技をもつ指導員の方が、日々訓練をしているが、専門的な知識を就職先で全て生かせるかということ、そうでもない。「社会に出た時に困らないようにここでいろいろな経験をする」。簡単なようで重い言葉を何度も耳にした。それぞれのプロの目線で関わり、きめ細かい指導をしているからこそ言える言葉だと感じた。

3 おわりに

特別支援学校は職員の人数の多い職場である。職員一人一人の専門性を強化し、指導の方向性を明確化し、一人でも多くの職員が一緒になって取り組むことが学校力となるのではと常日頃から考えている。今後とも私自身、研修に出たからと、おごることなく、高ぶることなく、日々研鑽に努め、生徒と共に学び、行動できる教諭でありたい。

授業を創る

主体的に考え表現できる児童を育むために

「魅力ある授業づくりの達人」認定教員

勝浦市立勝浦小学校教諭

たかおか
高岡

けんしん
顕慎

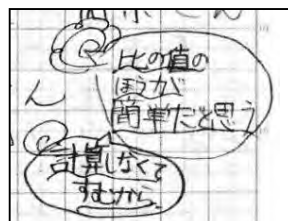
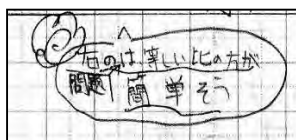


1 はじめに

小学校の教員となって10年、これまで様々な児童と出会ってきた。また、たくさんの先生方から指導法を学んできた。小学校教員だからこそ、児童との関わりも多く、様々な教科にわたって幅広く指導することが可能である。これまで私自身が実践してきた児童が主体的に学ぶための手立てについて紹介する。

根気よく積み重ねていくことにより、内容も具体的になり、数学的な見方・考え方に迫っていくことができるようになっていく。

【児童のふきだしの例】



2 授業実践

(1) 思考力を育てるふきだしの活用

授業の中で、教師が、児童の思考を見とることは難しい。また、自分の考えを整理して表現することが苦手な児童が多い。そこで、児童の思考をノートの中に表現するための手立てとして、「ふきだし」を活用した。ふきだしとは、学習中に児童が考えたことや思ったことを書いたものを指す。児童自身の思いをふきだしを使ってノートに記していくことで、児童の思考力を育てていく。また、教師は児童の思考の状況を見とり、支援に生かすことができる。

① 算数科での活用

最初は何を書いたらよいかわからない児童も見られる。そのため、まずは書かれたふきだしを授業の中で取り上げ、共有していく。その際、「わかった」「わからない」などの感想のようなふきだしも児童の思いの表出と捉え、認めるようにした。そして、ふきだしを評価したり、「前の学習の△△を使えばできそう」「こっちの方が簡単な」のような記述を教員が意図的に取り上げたりすることを

② 他教科での活用

国語科の夏の言葉を使って俳句をつくる学習で、「夏」と聞いて連想する言葉をノートにふきだしを使って自由に書かせる。その後、友達と書いた内容を交流し、よい表現は自分のノートに書きたし、俳句に生かせそうなふきだしには、色を使って囲ませる。こうすることで、言葉に対するイメージを広げることができる。また、道徳では、本時で迫りたい内容について導入で自分の考えをふきだしに書かせる。授業の終末で同じ内容についてふきだしや感想文を書かせることで、本時を受けて変容した自分に気づかせることができる。

ふきだしは、児童にとって書くことに対する抵抗感を少なくし、自由に表現する手立てである。また、教科の様々な場面で活用することができる。友達のふきだしを取り入れ認め合える場面を設定したり、授業の中での自己の変容を感じさせたりすることで、児童は自信を深め、より主体的に学ぶ意識が高まっていくのである。

(2)外国語活動について

本校の外国語活動は、毎時間ALTと授業を行っている。授業は自分自身がT1として授業を進め、ALTと積極的にコミュニケーションを図る様子を児童にも見せるようにしている。教師自身が積極的に行うことで、児童自身にもコミュニケーションを図ろうとする態度の素地が育まれると考える。その中で、習った英語を使わなければならない場や使ってみたいと思わせる場の工夫が必要である。

①学習形態の工夫

児童が外国語を使ってコミュニケーションを図ることが難しい要因として、言い間違えたら恥ずかしいという気持ちや言い方が分からない等から自信がもてないことが考えられる。そこで、授業での形態を一斉からグループ、グループからペア、ペアから個というように移行していく。そうすることで、児童は徐々に自信をもち、友達と積極的にコミュニケーションを図っていくことができる。また、教師やALTの発音を聞き、繰り返しているだけではコミュニケーション能力は育っていない。そこで、児童自身が「使いたい」と思うような場の設定が必要となってくる。
＜数を尋ねたり答えたりする Activity 例＞

(ア)「How many? 漢字クイズ」

一斉指導で行い、漢字の画数を尋ねる。国語との関連もはかることができる。

(イ)「How many? ピクチャークイズ」

グループで行う。一人が「How many?」とカードをめくり、他の人が、描かれているイラストの数を答える。小グループによる安心感と発音の場の保証がある。

(ウ)「How many? おはじき」

自由な二人組で行う。児童は任意でおはじきを握り、友達に尋ねる。尋ねられた児童は数を答え、正解ならおはじきをもらえる。早いもの勝ちではないので、苦手な児童も安心して活動することができる。

(エ)「What's my ナンバー?」

1～10までの数字カードを用意し、児童は自分に見えないように2枚選び、額にあてる。周りの友達に「How many?」と尋ね、聞かれた人は二つの数字を足した値か引いた値を答える。二人以上に尋ねなければ答えは分からない。友達に尋ねなければという必要感が生まれてくる。

このように進めることで、児童は自分の表現に徐々に自信をもち、積極的に活動することができるようになる。

②学習したことの日常化

学習した表現が生活のどのような場面で生かされるかということを経験することが大切である。例えば、「How are you?」の表現の学習をした後、定期的に朝の健康観察で「How are you?」を使ってみる。児童は学習した表現の中から自分の気持ちを表現しようとする。月や曜日などは英語のカードを用意し、毎日掲示するようにする。視覚的に訴えることで、英語を身近に感じることができる。

また、プリントを配る際、何気なく「How many?」と尋ねて配る。それを見たり聞いたりした児童は、自分が配る際に同じように「How many?」と友達に尋ね、配っていた。自然と外国語を使って生活の中でコミュニケーションが生まれていた。日常生活に外国語の表現を取り入れることで、外国語の学習から生活の中の外国語となり、児童にとってより身近な言語となっていく。

3 おわりに

これまで様々な児童と出会ってきたが、どの児童も学ぶことへの意欲をもっていた。私たちの使命は、その意欲を引き出し、継続させ、高めていくことではないだろうか。児童が主体的に学び、考えたことを表現したいと思える授業を創るため、授業実践を重ね、自分の授業力を高めていきたい。

子どもを知る

共有～子どもとともに～

成田市立久住小学校教諭 おおこ さおり
大胡 沙織



教員としての使命を胸に、教壇に立った1年目。初めての担任に、期待と不安でいっぱいでした。そんな私に教員としての在り方を示してくれたのが初任者研修です。研修では、学校現場に必要な知識や技術、子どもとの関わり方、更にベテランの先生方の授業参観など、様々な分野で御指導していただきました。中でも授業参観の研修は、自分が抱えている疑問や悩みを目で見て学ぶことができ、「真似できることから真似してみよう」と明日への指導への活力になりました。

また、一日でも早く子どもたちのことを知ろうと、休み時間は一緒に遊んだり、他愛もない話をしたり、できる限り子どもたちと過ごす時間を多くもつよう心掛けました。ふとした瞬間に、授業だけでは分からない表情や発言など、新しい発見をすることができて、子どもとの距離を近づけてくれるとても貴重な時間であったと感じています。

二年目になった今、充実した毎日を過ごしていますが、子ども達をよりよくするための指導や、教材研究など、まだまだ悩みは尽きません。自分の力不足を実感し、落ち込むことも多々あります。しかし職場には、いろいろな視点からアドバイスをしてくれる先生方がたくさんいます。私自身が「子どもと共に成長していきたい」という思いを忘れず、悩んだ時には相談し、見て学び、更にレベルアップできるよう精進していきたいと思っています。

子どもを知る

つながり広がる輪

県立東金高等学校教諭 くわはら あい
桑原 愛



「生徒の一人一人の可能性を引き出し、彼らに自信をつけさせてあげたい」と強く思い、私は教師を志しました。そして教師となった今でもその気持ちは変わりません。

私が教師になり、この一年間たくさんの経験をすることができました。授業では、生徒とともに活動し、「先生のアドバイスでできるようになりました。」「今日の授業楽しかったです。」と生徒から言われたときは、大変嬉しかったです。また、部活動でも生徒の技術が向上し、大会で活躍したときは涙が出そうなくらい、自分のことのように嬉しかったです。教員になって良かったと思いました。

しかし良いことばかりではありませんでした。授業の進め方や部活動の指導など、上手くいかないことで悩み、挫折しそうになる時もありました。千葉県の出身でない私にとって相談できる人が近くにいませんでしたが、そんなとき、先輩の先生方と初任者研修で出会った同期の仲間たちから激励とアドバイスをいただき、少しではありますが、成長することができたと思います。

初任者研修を通して出会った仲間と先生方の出会いに感謝し、そのつながりを大切に、これからも千葉県の生徒たちのために、私ができる精一杯の事を全力で行っていききたいと思っています。